

高齢化社会における気配りの3P

富山県農村医学研究会 越山 健二

寿命が延び、有史以来の高齢化社会が加速されている。

生老病死は、生命体の根元的苦悩である。老化、死は何人も避けられない。今日の高齢者は、明治、大正、時代に生まれ、青少年時代は、きびしい欠乏社会に耐えてきた人たちであるが、これからは、めぐまれた豊かな物資文明社会に生まれ育ち、自由で耐え忍ぶ事に不得手な人たちの参加がはじまろうとしている。

これら現在の高齢者や、その予備軍の人達も含め、その高齢者対策は、保健、医療、福祉など課題が山積し、複雑多様化が予測される。私は、高齢者の保健、医療に、参加して数年になるが、自身の体験も含め、特に配慮したい三つのPについて述べてみたい。

それは、(1)プライベート、(2)プライバシー、(3)プライドの三つである。これは、人間の基本的権利ともいえるものであり、高齢者に限られた事ではないが、特に高齢者の保健、医療について重要であると思うが、一般の関心がうすく、老人の心とからだ、心理など理解が不足し、無意識のうちに相手を傷つけ、落ち込ませ無気力にさせ、老人痴呆の誘因にもなっているように思われる。

第一はプライベートである。何れの人にもひとそれぞれに、人生歴がある。生れ育った環境、学歴、職歴をはじめ、体質、性格、教養、嗜好、趣味、気質など各個人別々のものであり、長い人生の中で、しみついたもので、容易に変えられないものである。それが保健や健康回復にとって悪い習慣であっても、そ

れを変えるには、あわてず、たゆまない努力と忍耐が必要である。又養護する人に限らず、家族や地域社会の人々のこの点についての気くばりが、大きな支えとなることは言うまでもない。

第二は、プライバシーである。誰にも、かくしておきたい事がある。歩行、排便、摂食、入浴、整容など、基本的日常生活動作の中でも、老化すれば機能の低下はさけられず、些細な事の中にプライバシーがある。特に歩行障害から寝たきりなどになれば、気力、体力の憔悴が著名となる。これを看護し、介助に対しては、老人自身の落込み、やるせなさ、人生の終末の思いの中で恥部をさらし、醜悪な肉体や悪臭を、公開する事の恥らひは、耐え難いものであると思われる。精神、心理的な心のうごきに深い思いやりを持つことが大切であり、その事が患者を勇気づけ、やる気や、積極性や協力性が出てくるように思われる。

第三はプライドである。どんな人にも、あるいてきた人生行路がある。特に老人には、長く生きぬいてきた自信と誇りがある。老化すれば、記名力の低下は何人にもおこり得る。知力が衰え、失見当や幻覚、妄想など、老人痴呆がすすみ、凶暴性が出て、災害や暴力沙汰が予見される事も稀ではないが、非をなじり、どなり、いため、恥をかかせ、自信やほこりを傷つける言動は、極力さげなければいけないと思う。強制し、高圧的、高飛年になることは、病態を重くし、一層の痴呆への道を早めるように思えてならない。精神、心理

的な脳機能の仕組みは、今日の科学、技術の進歩でも解明出来ず、手のとどかないところにある。高度な痴呆でも、尚高次な脳の機能が残されておりこれまで述べた三つのPの機能が色濃く残っている場合が多いと思われ、こ

の三Pについての配慮は、医療関係者は勿論、家庭や職場、地域社会のすべての人たちが改めて、学習し、見直してみる必要があると思う。